

『講左衛門さん、今月の広報おしのに掲載された、「おしのむらの歴史・文化・自然」について少し疑問があるでまっすん。「忍野八海のひ・み・つ」と言う題で、忍野八海はどうして八海なのか？と言う問題が出ていたでまっすん。「江戸時代はすでに忍野八海は小八海と呼ばれていた」という答えだったでまっすん。また、内八海・外八海について、問題2の「小八海」「内八海」「外八海」は何のためにあるのか？についても少し、説明が不足しているような気がするでまっすん？』

『疑問に思うことは、何より大切なことじゃ。さて、わしらもそうじゃが、文章にすると何よりも気をつけなければならないことは、誤解されないように丁寧に説明することじゃ。文章に残す意味をよく考えると、多くの人に伝えることを目的としているじゃろ。同じ文章でも読む人によって解釈が違ふ場合もあるんじゃ。皆同じに解釈してもらえよう文章を書くのは難しいが、心がけることが大切なんじゃよ。特に歴史については、想像しながら文章を書くことになってしまうからのう。さて、忍野八海については、いつ頃から存在していたのかという視点が難しいと思うんじゃ。そもそも、当ても現在も忍草には、八海以外にいくつも湧き水が湧いていることは知っておるじゃろ。その湧き水の中で、とても大切な場所が、「湧池」じゃ。東円寺に残る版木には、湧池の場所に「行場」と記されている意味はとても重要ことじゃ。「行場」と言えば、そこは富士修験の修行の場所であったということじゃ。「湧池」という重要な場所を起点に7つの池を選んで、「根元八海」または、「根元八湖」とされたということじゃな。「根元八海」については、天保15年(1844)寛永寺から東円寺に宛てられた書状に「根元八海再興」と書かれていることが意味深いと思うんじゃ。また、「再興」という記述に視点を注がなくてはいけないが、なかなか想像の域を超えないことはもどかしいことじゃな。』

『視点が違ふと、全く違ふ見方ができると言うことが分かったでまっすん。安易な記述は、誤解を招くでまっすん。富士山が世界文化遺産となり、忍野八海は信仰の池として構成資産になったでまっすん。おいらは、信仰についてしっかり語り継がなくてははいけないでまっすん。』

『「忍野八海」と「内八海・外八海」は、その存在の意味が全く違ふんじゃがクニマッスンに分かるかな？』 『「内八海・外八海」は、富士山に登る前に、身を清めることが目的でまっすん。身を清めるためには、相応の意味がなくてははいけないでまっすん。それが、仏教の曼荼羅でまっすん。曼荼羅は、大日如来を中心に仏様が配されていて、その意味から、「泉瑞」を内八海の一つとカウントすると富士山を一周できないでまっすん。もう一つの説の静岡県にある須戸湖(沼津・富士市)なら、一周できるでまっすん。どちらが正しいのかは、今となっては分からないから、どちらの説も説明が必要でまっすん。』

『丁寧に説明することは難しいのう。さて、この話の続きは次回じゃな。』



クニマッスン  
出生地 忍野村  
山梨県水産技術センター  
口癖 でまっすん..



ふじのだいがこうざえもん  
富士大我講左衛門 年齢不詳  
職業 大我講の先達  
(先達とは案内責任者)